

リゲティ論文所載パスパ文字百家姓と東洋文庫蔵本

吉池孝一

一

宋時代の民間類書である『事林広記』の中に「百家姓蒙古文」が収められている。漢字表記の姓を見だしとし、それにパスパ文字を付したものである。言うまでもなく、パスパ文字は元のフビライの時代に作られたわけであるから、この部分は元代に増補されたものということになる。これをパスパ文字百家姓と呼ぶことにする。『事林広記』所収のパスパ文字百家姓は、これまでの研究により、四種の版本に収められたものが知られている。

- 一．元至順年間(1330-1333) 建安椿荘書院刻本
- 一．元(後)至元六年(1340) 建陽鄭氏積誠堂刻本
- 一．日本元禄十二年(1699) 翻刻元泰定二年(1325) 刻本
- 一．リゲティ論文(1956) 所載本。

この内、リゲティ論文(注1)に添付されたパスパ文字百家姓について、照那斯図1981(注2)および照那斯図2003(注3)は、これを日本静嘉堂文庫蔵の明永楽十六年(1418)建陽翠岩精舎刻本とし、羅常培・蔡美彪2004(注4)は日本内閣文庫蔵本とする。照那斯図(1981,2003)および羅常培・蔡美彪(2004)の説くところが、諸版本中の系統を問題としているのか、それとも直接に基づいた書籍を問題としているのか、いまひとつはっきりしないけれども、もしも後者であるならば、これらの説は誤解である。リゲティ論文所載本は日本の東洋文庫に蔵されている『新編纂圖増類群書類要事林廣記』(請求番号はXI-3AC-15、明初刊、10冊大、二帙)を複写したものである。なお、森田憲司1993(注5)によると、この東洋文庫蔵本は慶応大学蔵本と同版であるという。

二

リゲティ(1956;p.6)には、日本の石田幹之助氏よりパスパ文字百家姓の複写を譲り受けた旨が記されている。石田氏は東洋文庫創設に深く関わった人物であることから、リゲティ氏が手にしたパスパ文字百家姓の複写は、東洋文庫所蔵本の何れかによるのであろうと考えてはいたが、これまで確認を怠っていた。このたび、『KOTONOHA』27号でパスパ文字百家姓に言及したことを契機に、東洋文庫に出かけ調査をさせていただいた次第である。

版本は幾つかあったが、その内、貴重書籍となっている請求番号XI-3AC-15の『新編纂圖増類群書類要事林廣記』とリゲティ論文所載本を見比べたところ、紙の破れや折れなどが一致し、後者は前者の複写であることがわかった。下に参考まで、二カ所の破れを挙げておく。



東洋文庫蔵本



リゲティ論文所載本

これ以外に、内容に関わる興味深い点があった。東洋文庫蔵本には朱の書き込みがあり、その部分がリゲティ論文所載本には黒く写っている。東洋文庫蔵本のカラー複写により朱の部分を明示できれば良いのであるが、印刷の都合により割愛せざるをえなかった。なお、白黒の複写であっても、濃淡の差により元の文字と後の補写を区別することができる場合もあるが、論文に転載されたものとなると両者の区別は難しくなる。ここでは、区別が困難となったリゲティ論文所載本により問題の箇所を提示し、文字の状態を見ていただくこととする。先ずパスパ文字を訂正した箇所を二つ挙げ、次に漢字を訂正した箇所を一つ挙げる。



孫に付されたパスパ文字

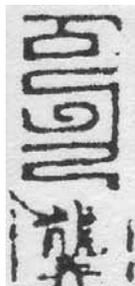


刁に付されたパスパ文字

「孫」の声母に対応する子音文字は ㄣ s であるが、東洋文庫蔵本では上半分は紙の折れのため不鮮明である。下半分の墨ズリの部分は母音の ㄨ i のように曲線となっている。これは ㄣ s とすべきところを、 ㄨ n と誤刻したものであるかもしれない。同版という慶応大学本で確認をする必要がある。東洋文庫蔵本はこれに朱を入れて曲線を角張らせ、 ㄣ s の一部であるかのように訂正している。その結果、上に挙げた白黒の複写では、曲線と角張った線が二重に見え、本来の線が何れであるか区別することができなくなっている。リゲティ氏の直接利用した複写がどのようなものか明らかではないが、少なくとも、論文に掲載された白黒の複写では両者の区別は困難であるというところをご覧いただきたい。なお、リゲティ(1956)には、このパスパ文字について何も述べるところはない。「刁」の声母に対応する子音文字はさらに興味深い。これは ㄣ d でなければならないところ、東洋文庫蔵本を見ると、墨ズリの部分は ㄣ h となっている。おそ

らく左隣にある𑖇の影響により誤刻が起こったのであろう。それに朱を入れて𑖇の下半分のふくらみを訂正し𑖇の字形にしている。その結果、上に提示したように、論文に掲載された白黒の複写では𑖇とも𑖇ともつかない字形となっている。しかし本来は明らかなる𑖇_hである。この字形につき、リゲティ（1956;p.19）に「この d の文字は、後に h から訂正されたものである」（Le signe d est corrigé ultérieurement d'une h.）と注記があることからみて、リゲティ氏が直接手にした複写は、元の文字と後の補写を区別できるようなものであったことがわかる。

次は漢字を訂正したものである。



東洋文庫蔵本の墨ズリの部分は「龔」（現在のピンインでは long）となっている。文字の下は「土」であるが、その「土」に朱を入れ「共」とし、「龔」（現在のピンインでは gong）の字としている。論文に掲載された白黒の複写では「龔」に見える。もちろん、パスパ文字よりみて「龔」が正しいのであるが、「龔」と「龔」は別字である。リゲティ（1956）は、他の部分において、漢字の異同についても注記していることからみて、「龔」と「龔」の違いを認識していたならば、注記を必要とする箇所の一つであろう。しかしながらリゲティ（1956）には何も述べるところがない。以上の状況からみて、リゲティ氏が石田氏より入手した複写は、白黒の複写であったと考えたい。白黒の複写では墨と朱は濃淡の差となって現れる場合もあるが、下に付されたパスパ文字など一部を除き、全体に両者の判別は難しくなっていたのであろう。

三

リゲティ（1956）はパスパ文字百家姓を体系的に研究した嚆矢であり、パスパ文字の研究史にとって重要な論文であるが、その拠った資料について、これまで定まった見方はなかった。今回の調査で、リゲティ論文所載本は、東洋文庫蔵の『新編纂圖増類群書類要事林廣記』（請求番号 XI-3AC-15）を複写したものであることがわかった。また、東洋文庫蔵本には朱による訂正がなされており、それがリゲティ論文所載本および注記に反映されていることも明らかとなった。

注

- 1) リゲティ（1956）, *LE PO KIA SING EN ÉCRITURE 'PHAGS-PA*, *ACTA ORIENTALIA*, 1956, 1-52.
- 2) 照那斯図（1981）, 「八思巴字百家姓校勘」『民族語文論集』社会科学出版社. 227-271 頁.
- 3) 照那斯図（2003）, 『新編元代八思巴字百家姓』文物出版社.
- 4) 羅常培・蔡美彪（2004）, 『八思巴字与元代漢語：增訂本』中国社会科学出版社。旧著 1959 年.
- 5) 森田憲司（1993）, 「『事林広記』の諸版本について---国内所蔵の諸本を中心に---」『宋代の知識人---思想・制度・地域社会』汲古書院. 287-316 頁.